

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

超空間を求めて : ウスペンスキーの奇妙な旅

著者	向山 毅
雑誌名	研究論集
巻	88
ページ	135-152
発行年	2008-09
URL	http://id.nii.ac.jp/1443/00006199/

超空間を求めて

——ウスペンスキーの奇妙な旅——

向 山 毅

要 旨

ウスペンスキーは主としてグルジェフの弟子であり、その思想の解説者・伝道者として取り扱われてきた。これまでのウスペンスキーに関する著書では、ほとんどが彼とグルジェフとの交流と別離に重点が置かれている。しかし彼はグルジェフと出会う以前から、高次元空間を認識することにより人間の意識を拡大しようとする、「超空間哲学者」として優れた著作を残している。この論文では、最初の超空間哲学者であったヒントンの後継者としてのウスペンスキーに注目し、彼の「超空間哲学」特にその独自の時間論・空間論について述べる。

キーワード：超空間哲学、四次元、空間、時間

1 はじめに

19世紀の後半から20世紀の初頭にかけて四次元空間は知的興味の対象であり、一種のブームと言ってもよい状態であった。それまでアリストテレス以来、私たちの生活している空間は平らな三次元空間であると考えられており、四次元やそれよりも高次元の空間については言及するものもいたが、真面目に取り上げられることはなかった。こうした状況が変化したのは19世紀になってからのことである。1820年代からロバチェフスキー、ポヤイ、リーマンたちによる曲がった空間での幾何学すなわち非ユークリッド幾何学¹⁾の発展とほぼ同時期に、メーヴィウスは四次元空間内における三次元物体について考察している。

1840年代になると四次元、あるいはもっと一般化された形である n 次元空間における幾何学の研究が盛んになった。こうした風潮を受けて19世紀の後半には、未知の現象を四次元空間を考えることによって説明しようとする人たちが現れた。四次元思想の歴史についてはマニングの『四次元幾何学』[1]、リンダ・ヘンダーソンの『現代芸術における四次元と非ユークリッド幾何学』[2]あるいは著者の論文[3]に詳しく述べられている。また非ユークリッド幾何学と n 次元空間についての1911年までに出版された論文のリストが集められている[4]²⁾。

19世紀というのは、物理学を中心とした自然科学の急速な発展により、天体や物体の運動、電気、磁気、熱、光など私たちの五感で経験できる巨視的世界に対して、いわゆる古典的世界観が確立した時期にあたっている。人々はニュートンの力学とマックスウェルの電磁気学によって、私たちの住む世界が完全に理解できたものと信じた。この古典的世界像の基礎となっていたのがカントの哲学であった。イマヌエル・カント (Immanuel Kant) によれば空間および時間は実在ではなく、我々にア・プリオリに与えられている先験的観念であり、人間の認識の仕方に関連している[5]。彼は高次元空間の存在の可能性も検討したが、重力が距離の二乗に逆比例していることから空間は三次元であると結論している。

一方、心霊主義者は超自然現象の存在を四次元空間によって説明しようとしていた[6]。そんなときに起こったのが1877年ロンドンでのスレード裁判で、これによって四次元は脚光を浴びることとなった。ヘンリー・スレード (Henry Slade) は心霊ブームにあやかって米国からやってきた霊媒の一人である。彼は呼び出した霊が自動的に石版にメッセージを書くという心霊筆記を得意としていた。スレードの出席する交霊会は大評判で盛況を極めたが、ある出席者にトリックを見破られて詐欺罪で告発されたのである。彼の裁判には物理学者のクルックス卿 (Sir William Crookes) を含む多くの著名人が弁護に立ち上がり、心霊現象と四次元の関係を主張した。そのうちの一人がライプチヒ大学の天文・物理学教授であったヨハン・カール・フリードリッヒ・ツェルナー (Johann Karl Friedrich Zöllner) であった[7]。ツェルナーはスレードをライプチヒに呼び、彼と大学の同僚の前でロープを用いた実験を行わせた。その結果は四次元空間の存在を証明するものであると、『超越的物理学』[8]という著書で述べている。この事件により四次元空間は多くの人たちの注目を集めるようになった。

そのうちに四次元をテーマとした文芸作品が現れるようになった。シェイクスピア学者であり、学校長そして牧師でもあったアボット (E. A. Abbott) は1884年、二次元の世界での物語『平面国』を発表した[9]。厚さのない平面上で暮らしている主人公スクエア (正方形) 氏は三次元空間からの使者スフェア (球) 氏の訪問を受け、高次元の世界を体験する。この小説ではヴィクトリア朝の英国社会への風刺とともに、高次元空間に対する興味とそれを訪問することによる神秘体験が述べられている。この本は大成功をおさめ、二次元世界を描くことで高次元空間を表現する手法はこれ以降多くの作者によって用いられることとなった。

四次元のもう一つの表現は、時間を第四番目の次元と考え、空間の三次元と合わせて四次元空間とすることである。これは厳密な意味での四次元空間ではないので、四次元時空とも呼ばれている。四次元時空では私たちが空間軸を自由に行き来するのと同じように、時間軸に沿っても自由に移動できるものとなればタイムトラベルが可能になる。こうした考えは既に18世紀からあったが、ウェルズ (H. G. Wells) は1895年に『タイムマシン』というタイトルの時間

旅行に関する小説に適用した[10]。その後タイムトラベルやタイムマシンはSF文学や映画で一つの大きな分野となり、多くの作品が作られた[11]。

このようにして四次元への関心が盛んになるにつれて、四次元空間を実在するのものと考える、それを認識することにより私たちの知覚の限界を超えようとする人たちが現れた。彼らは空間が先験的観念であるというカントの哲学を逆手にとって、空間の四次元性を認識することによって「高次の意識」を進化させようとしたのである。リンダ・ヘンダーソンはこうした考え方を「超空間哲学」と呼んでいる³⁾。最初の「超空間哲学者」と考えられるのはチャールズ・ハワード・ヒントン (Charles Howard Hinton) である。数学者であったヒントンは『思考の新紀元』[12]と『四次元』[13]という著書を通じて「超空間哲学」を展開するとともに、四次元を視覚化することに努めた。ヒントンに大きく影響を受けたのが米国のクロード・ブラグドン (Claude Bragdon) とロシアのウスペンスキー (P. D. Ouspensky) である。ブラグドンは『高次元空間入門』[14]と『四次元の展望』[15]で四次元空間を意識の進化と考えた。前者では四次元空間の概念を多くの図面を用いて示している。一方、ウスペンスキーは『四次元』[16]、『ターシャム・オルガナム』[17]、『新しい宇宙像』[18]⁴⁾で独自の時間論と空間論を展開した。『四次元』は後に『新しい宇宙像』に一つの章として含まれている。また『ターシャム・オルガナム』はブラグドンによって英訳された。ヘンダーソンは「超空間哲学者」としてこの三人の名前しか挙げていないが、ルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner) もヒントンの影響を受けた一人で、神智学の立場より四次元空間について講義をしており、その講義録が『四次元』というタイトルで出版されている[19]。

これらの「超空間哲学者」のうち、ヒントンについては多くの四次元に関する書物や論文で紹介されているし (例えば[2]、[20])、シュタイナー[3]とブラグドン[21]については既に論文で述べた。一方、ウスペンスキーはオカルト哲学の分野では有名人であり、彼について書かれた本も多く、またその著書の多くが日本語に翻訳されている。しかし彼が一般に知られているのは、コーカサス出身のオカルト思想家ゲオルギー・イヴァノヴィッチ・グルジェフ (Georges Ivanovitch Gurdjieff) の弟子、その哲学の解説者・伝道師としてである。例えばコリン・ウィルソン (Collin Wilson) はその著書『オカルト』[22]でウスペンスキーを独立には取り扱わず、「二人のロシア人魔術者」(ラスプーチンとグルジェフ) でグルジェフの章の中に含めている⁵⁾。彼の伝記もその「超空間哲学」よりも、グルジェフとの関係に重点が置かれている[23-26]。「超空間哲学者」としてのウスペンスキーについて詳しく述べているのはヘンダーソンのみである⁶⁾。しかし彼女は『ターシャム・オルガナム』以後のウスペンスキーの時間・空間論の発展については取り上げていない。この論文ではウスペンスキーの超空間哲学について考えてみる。

2 ウスペンスキーの生涯

ウスペンスキーの生涯、特にその青年時代に関しては不明な部分が多い。若い頃には彼は頻繁に旅行していたし、またグルジェフに会う以前の自分の過去についてはあまり詳しく語ることはなかった。著書『さらなる記憶』[27]の中に1935年に書かれた「自伝的断片」という文章⁷⁾がある。これと伝記[24]を参考に彼の生涯を追ってみよう。

ピョートル・デミアノヴィッチ・ウスペンスキー (Pyotr Demianovich Uspenskii, Peter Demianovich Ouspensky) は1878年3月5日にモスクワで生まれた。母方の祖父は肖像画家であり、後に教会の画家となった。これは当時のロシアでは高い地位にあったことを意味している。父は測量局に勤務していた役人で、絵画と音楽を好んでいたという。彼はまた数学者でもあり、特に四次元の問題に興味を抱き、その研究に多くの時間を費やしていた。母も才能ある芸術家で、絵を描き、文学にも興味を示していた。

このような環境で育ったウスペンスキーが、文学、絵画、自然科学に興味を持つようになったのは当然であろう。彼にとっては学校は決まりきったことを強制する所であり、退屈な場所でしかなかった。そのため18歳でギムナジウムを中途退学し、新聞記者と翻訳家になった。その後モスクワ大学の聴講生となるが、アカデミズムを嫌悪していて、決して単位や学位を修得することはなかった。学生時代には自然科学と心理学に魅せられる。しかしやがて自然科学には失望するようになる。特に四次元が数学的な形式でしか取り扱われていないことに深く失望した。

子供時代にはレールモントフやツルゲーネフを好んだが、20代の始めにヒントンの『思考の新紀元』[12]と『四次元』[13]を読んで大きな影響を受けた。これらの本のロシア語訳が出たのが1915年であるから、彼は原語(英語)でヒントンを読んだものと思われる⁸⁾。

この頃彼が一番関心があったのは永劫回帰の思想であった。時間が過去から無限の未来に向かって直線的に流れるものではなくて円軌道を描くものとすれば、いずれは出発点に戻ってくる。したがって過去は繰り返すのだ。これは四次元空間において時間を高次のパラメーターとする考え方に対応しているといえる。この考えに基づいて書かれたのがウスペンスキーの処女作となる『イワン・オソーキンの奇妙な生涯』[28]である。この本は1905年に『キネマドラマ (Kinemadrama)』という題名で映画の脚本として書かれ、1915年に小説に書き直されて、彼の死の直前である1947年に英語訳が『イワン・オソーキンの奇妙な生涯』として出版された。

若い頃のウスペンスキーについてはほとんど何も知られていない。しかし『イワン・オソーキンの奇妙な生涯』はほぼ彼の体験に基づいているようで、自伝であると考えてもよいであろう。主人公の若者は学校から追放され、情熱的な恋をするが不幸な結果に終わる。彼は魔術師の助けを借りて過去のある時点まで戻り、間違いを訂正してもう一度人生をやり直す、最後

はまた同じ結果になり何も変わらない。ウスペンスキーの円環状の時間という考え方からすれば、何らかの方法で抜け出さない限り私たちの人生はこの円周上で永久に繰り返されるのである。この小説には「四次元」という言葉は出てこないが、「永劫回帰」の思想はその後の彼の時間・空間論のバックグラウンドとなっている。

ウスペンスキーはモスクワの新聞社で働きながら、永劫回帰からどうしたら脱却できるのか模索していた。彼は敏腕新聞記者として活躍しながら、満たされぬ想いを抱いていたころの姿を『新しい宇宙像』の序章で描いている⁹⁾。この文章は、ウイルソンの『オカルト』において第一章の冒頭部分に引用されている¹⁰⁾。

1908年にウスペンスキーはエジプトとトルコを旅行する。彼の東方への旅の始まりである。彼は若い頃から、私たちが日常暮らしている「可視の世界」の他に「不可視の世界」があることを信じていた。こうした高次元の世界の存在を認識し、それを理解するための意識を開発することを求めていた。そのためにオカルト関連の文献を読み、夢や薬物を用いることも試みた。やがて彼は世界のどこかに、「可視の世界」と「不可視の世界」との間に橋をかける重要な知識を長年にわたって伝承し、保存している人々が存在するはずであると考えようになった。彼はこのような高次元空間による自分に根拠を与えてくれる「永遠の叡智」を東洋の宗教に求めた。こうした真理を探究するための旅が始まったのだ。

1909年に彼はモスクワからサンクト・ペテルブルグに移る。次の年『四次元』が出版され、引き続いて1911年に『ターシャム・オルガナム』が完成、1912年に出版された。これらの本はいずれもウスペンスキーの超空間哲学の中心となるもので、次の章で詳しく述べる。1913年から1914年にかけてウスペンスキーはロンドン経由でセイロンとインドを訪れた。最初はペルシアまで行く予定であったが、第一次世界大戦が勃発したため計画を変更して急遽ロシアに戻った。この旅行で彼はいくつかの教団（スクール）の存在を知ったが、そのいずれもが彼の求めていたものではなかった。インドでは神智学協会のアニー・ベサント（Annie Besant）と会っている。しかし神智学も彼の目的に応えるものではなかった。ウスペンスキーはインドとセイロンへの旅行体験に関する公開講演をサンクト・ペテルブルグとモスクワで開催し、多くの聴衆を魅了した。

1915年の春、ウスペンスキーはモスクワでの講演の出席者から一人のスクールの指導者の存在を教えられる。グルジェフとの運命的な出会いである。初めて喫茶店で会ったグルジェフの印象は強烈であった。彼はウスペンスキーが探し求めていた問題に対する解答を持っているように思われた。ウスペンスキーはこれまでの知識概念を超えるまったく新しい思想体系に出会ったと感じたという。彼は一週間グルジェフと過ごした後、ペテルブルグに帰っていった。このときのグルジェフとの会話は『奇跡を求めて』[29]の第一章に記録されている。やがてその年の秋にグルジェフがペテルブルグを訪れ、二人の交際は続いた。

グルジェフの生年月日にはいくつかの説があるが、1877年12月28日に当時はトルコ領であったアレクサンドロポールで生まれたとされている¹¹⁾。そうだとしたらウスペンスキーより2ヶ月年長ということになる。グルジェフの思想を簡単に言ってしまうと次のようになる。私たち人間の問題は自分が完全な意識を持っており、自分自身をコントロールしているものと誤解していることにある。実際には私たちは周囲で生じていることにただ単に反応しているだけである。しかし人間には自己を知り、意識的に行動する能力がある。したがって意識を持った行動をとることにより、日常の経験に意味を与え、自分自身をより高次の存在に変えることができる。

彼は「ワーク」を通じてこのような意識開発をする「システム」を持っていた。グルジェフが彼の思想体系について書いた本は、読者に努力させるためにわざと難しくしてあると言われるほど難解であり、ウスペンスキーの『奇跡を求めて』[29]が一番よい入門書となっている。このようなこともあってウスペンスキーは彼自身の哲学よりは、グルジェフの思想の解説者として有名になった。これはちょうどキリストに対するパウロの役割に相当する。

1916年の終わりにウスペンスキーは召集されて戦場に送られた。しかし近視のために四ヶ月後に除隊となりペテルブルグに戻る。これはロシア革命勃発の二週間前であった。グルジェフは革命の直前に故郷のコーカサスに移っていた。ウスペンスキーもしばらくしてコーカサスに向かい、グルジェフはここにモスクワとペテルブルグのグループを呼び寄せた。彼らは内戦を避けて黒海沿岸などに移動した。

1918年になるとウスペンスキーとグルジェフの間に亀裂が生じるようになり、夏にウスペンスキーはグルジェフの許を去ることになる。その原因についてはウスペンスキーは決して詳しくは語ることは無かった。二人の間に何があったかが、ウスペンスキーの（そしてグルジェフの）伝記の主要なテーマである[23-26]し、特にこの問題について書かれた本[30]もある。我が国においてもウスペンスキーとグルジェフの関係を扱った小説『グルジェフの残影』が出版されている[31]。またピーター・ワシントンの『神秘主義への扉』[32]には、ウスペンスキーと神智学との交流およびグルジェフとの関係が述べられている。グルジェフはいかがわしいところのある人物であり、時によって異なった言動をとり、またわざと人を怒らせることも多かった。こうしたことも「ワーク」の一部だと考えていたところもある。ウスペンスキーはグルジェフの思想には共感を覚えたが、その人物にはついて行けないと感じるところがあったと思われる。

ウスペンスキーは1920年の初めにコンスタンチノーブルにたどり着く。そこで彼は米国のブラグドンからの手紙により『ターシャム・オルガナム』が英訳出版されたことを知る[21]。8月にはグルジェフがコンスタンチノーブルに到着し、再会して一緒にワークをするが、二人の仲が元に戻ることはなかった。1921年8月にウスペンスキーは『ターシャム・オルガナム』の

愛読者であったある貴婦人の援助でロンドンに移り、そこでグループを作った。一方、グルジェフはフランスに渡り、パリとフォンテーヌブローに道場を開いた。ウスペンスキーはそのための資金の一部を援助している。その後互いに交流はあったが、1924年1月に二人の関係は完全に決裂した。ウスペンスキーはロンドンでワークを続けていたが、第二次世界大戦中の6年間はニューヨークで暮らした。1947年の初頭にロンドンに戻り、その年の10月に死亡している。

ウスペンスキーはグルジェフと出会った後は新しい本を書いていない。『新しい宇宙像』[18]は1931年に出版されているが、その内容はグルジェフに会う前に既にほとんど完成していた。また死後に出版された『奇跡を求めて』[29]は上に述べたようにグルジェフ思想の解説書であり、ウスペンスキー自身の独自の哲学を述べた部分は少ない。ウスペンスキーはグルジェフに出会ったとき、知識によって高次の意識を獲得しようとする自分の方法に行き詰まりを感じており、「ワーク」を中心とするグルジェフの「システム」に解決を求めた。グルジェフ個人に対しては人間的に幻滅を感じていても、彼の開発した「システム」を超える新しい方法を見出せぬまま、「ワーク」を行い「システム」を継続していったものと思われる。したがって「超空間哲学者」としてのウスペンスキーは、グルジェフの影響を受ける以前の著書によって考えねばならない。

3 ウスペンスキーの超空間哲学

ウスペンスキーの「超空間哲学」についての最初の著作は『四次元』[16]である。これは後に『新しい宇宙像』[18]の第二章に「四次元」として再録されている。『四次元』の初版および1914年に出版された第二版と『新しい宇宙像』での「四次元」との比較がヘンダーソンによって行われている¹²⁾。『四次元』はウスペンスキーが31歳のときの作品であり、彼の超空間哲学の出発点となった著作であるが、これまであまり詳しく取り上げられることはなかった。ヘンダーソンは「基本的には19世紀の四次元概念についての報告書」¹³⁾のようなものであると述べているが、ウスペンスキーの四次元および高次元空間についての思想の発展を考える上では非常に重要である。

そこでウスペンスキーはまず人類にとって解決不可能な問題は、不可視の問題と死の問題であると指摘する。世界は目に見えるものと見えないものに分かれており、宗教、哲学、科学において不可視なものが目に見える現象の原因になっている。死に関しても死という現象、来世の概念、霊魂の存在などの背後にはやはり不可視の世界がある。こうした不可視の世界を理解するためには通常の方法では不十分であり、何か新しい角度からのアプローチが必要となる。

ウスペンスキーは「四次元という概念、多次元世界というアイデアは我々の世界像を拡大す

るための方法である」¹⁴⁾と考へて、「四次元」という概念を不可視の世界と結び付けようとしている。これはそれまでの宗教や哲学が不可視の世界を、目に見える「三次元」の世界とまったく同様に扱ってきたのに対して、新しい「超空間哲学」を示唆するものである。

彼は幾何学における四次元や多次元空間についてはどの定理とも矛盾せず、その意味では何も問題はないとしている。しかし私たちが未知の方向に向かって飛び出して知覚の領域を拡大するためには、「四次元の幾何学」ではなくて「四次元の物理学」が必要であると考えている。ウスペンスキーはロバチェフスキーが四次元の幾何学を発見したと書いているが、これは彼が非ユークリッド幾何学と四次元の幾何学を混同しているところがあることによる¹⁵⁾。確かに非ユークリッド幾何学のように、平らではない空間を取り扱うには一つ多い次元の空間が必要である。例えば曲面（二次元）は三次元空間の中でしか描けない。だが三次元非ユークリッド空間の物体は三つの次元（座標）で表わされるので、あくまで三次元である。しかしウスペンスキーは後に『ターシャム・オルガヌム』では非ユークリッド幾何学と四次元の幾何学とを正しく区別している。

ウスペンスキーは物理学的な側面から四次元の問題をアプローチした人として C. H. ヒントンを高く評価している。彼はヒントンの高次の意識を目覚めさせるためには「自己を放棄」することによって四次元を認識する、すなわちあるがままの世界を知覚する能力を開発しようとしていることに注目した。しかしヒントンの方法は個人差を無視しており、その手法が全ての人に適用できるのかということに疑問を呈している。

我々の世界は四次元世界の三次元への投影あるいは断面であるとも考へることができる。ウスペンスキーは N. A. モロゾフが獄中で同僚の服役囚に書いた手紙を引用する¹⁶⁾。そこでは水面上のような二次元世界の生物が三次元の生物をどのように知覚するかが述べられており、これを私たちの三次元世界の住人が四次元が存在するとしたときの関係に適用できることが示唆されている。このような考え方は既にアボットが「平面国」[9]で示しているが、ウスペンスキーはこの作品については知らなかったようである。モロゾフによればもし四次元世界があるとすれば、私たち三次元世界には「心霊現象」という形で現れるはずである。しかしこうした現象は確認されていないことより、モロゾフは四次元世界は存在しないと結論した。これに対してウスペンスキーはなぜ四次元を心霊現象の中のみ認めたのか、そして「霊的なもの」を否定することがなぜ四次元を否定することになるのか理解できないと、モロゾフの結論を疑問視している¹⁷⁾。

二次元生物は説明できない現象に直面したとき、最初は超自然現象と考へるだろう。しかし説明不可能な出来事が一定の法則性を持って生じることが観測されたなら、何らかの仮説で説明しようとする。もし三次元の存在を認めれば説明できると分れば、現実の物体は三次元を持っていると認識するだろう。さらに彼自身も三次元の存在であると結論するかもしれない。同

じことが我々と四次元世界の関係にも当てはまるだろう。「私たちの世界で目に見えないもの、説明できないものは三次元空間の中で説明しようとしているから」で、「それは本当は我々の世界の外部、高次元空間で起こっているのだと考える」ことができる¹⁸⁾。したがって我々は事物をありのままには見ていない。実体を持っているのは四次元の事物である。もしそうだとするなら、三次元での我々も架空の存在であるか、そうでないなら我々自身が四次元の存在であることを認めなければならない。

ウスペンスキーは通常の「物質的なもの」以外に「心的なもの」を加えて、心的現象が四次元の領域に属するものと考え。ここでいう「心的なもの」とは心理的、精神的な現象の意味で、心霊主義や神智学における用語とは異なっている。心的なものは物質的なものとは必ずしも平行関係にあるのではなく、四次元空間における新しい軸と同様にまったく独立していると考え。「我々は四次元世界に生きているのだが、三次元世界の自分にしか気づいていないのだ」¹⁹⁾と言える。

四次元超立方体（ヒントンの用語にしたがえばテッサラクト）は、三次元立方体内部の全ての点が動くことによって作られる。すなわち最初の立方体の外部領域に成長した無限個の立方体である。同様な条件で考えられるのは物体の膨張と収縮である。それぞれの点の軌跡は物体の中心と線で結び付く。この運動の方向は中心からの放射線となる。こうした四次元の運動は物体の元の形状を保ったまま、その大きさだけを変化させる。

ウスペンスキーはヒントンが『四次元』[13]で述べているように、生きている有機体の構造に見られる対称性は粒子の四次元運動によって説明できると考える。雪の結晶や冬の葉のない木などは四次元の図形である。これらは対称性の運動原理に基づいて作られる。物質の粒子はそれぞれと中心を結ぶ直線に沿って運動している。

その後、ウスペンスキーは物質、状態、エネルギーについて話を進めているが、彼の時代にはまだ物質の構造についての物理学的な知識は十分ではなく、その議論は現在では納得の行くものではない。最後に「心霊主義者」や「オカルティスト」が四次元を「アストラル界」で起こった現象としていることについて述べている。アストラル界とは私たちの空間には当てはめることのできない現象のための世界であり、その意味ではこれまでの議論と似たところはあるが、アストラル界の存在は確認されていないとしている。

このようにしてヘンダーソンが述べているように、ウスペンスキーの『四次元』は彼独自の思想というよりは、それまでの四次元空間についての考え方を解説したものに近いと思われる。ウスペンスキーの「超空間哲学」はこの本を土台にして、彼の主著と考えられる『ターシャム・オルガヌム』で一気に花開くことになる。

「ターシャム・オルガヌム」は普通は「第三の思考規範」と訳されている。論理学の体系としてはまずアリストテレスの『オルガノン』（論理学）があり、これに対してフランシス・ペー

コンは『ノヴム・オルガヌム』（新しい論理学）を出版した。ウスペンスキーは高次元空間を理解するためにはこれらを超えた論理学の概念が必要であるとの見地より、その著書を『ターシャム・オルガヌム』と名付けたのである²⁰⁾。

この本は「最も難しいのは我々は何を知っており、何を知らないかを知ることである」という言葉で始まる²¹⁾。彼はまず時間と空間に関するカントの哲学から出発する。カントによれば感覚によって知覚される全ての物体は時間と空間の中で知覚されるが、物自体は時間と空間とは独立に存在している。私たちが感覚を通して物や事象を知覚するときには、時間と空間という知覚形式を通してのみ可能であり、時間と空間は世界の特長ではなくて、私たちの知覚の特長である。コリン・ウィルソンはこのことを「身なりのいい人しか入れようとしなないナイトクラブの玄関番」という上手い例で表現している。「事物は空間と時間をまもっていなければならないという。裸のものは入場を許されないのだ」²²⁾。

ウスペンスキーは「カントは問題を提示したが、その解決法を与えなかった」といっている。この状況を一步前進させたのがヒントンである。カントは空間と時間の中で感覚を通して知覚することが物自体を見る妨げになっているという。しかし空間的知覚を障害として見るのではなく、世界を理解するための手段としてとらえることができる。我々は空間という手段によって事物を理解していると考えるのだ。したがって空間的知覚を発達させることによって新しい概念に到達できる。ヒントンは『思考の新紀元』と『四次元』でそう主張した。彼は四次元的な知覚を創造するために着色した立方体を使用する方法を開発したが、ウスペンスキーは上に述べたようにヒントンの方法は一般的ではないとコメントしている。

一次元（線）や二次元（面）の空間と三次元空間（立体）との関係より類推して、四次元空間は三次元空間と次のような二つの関係にあるものと考えられる。まず、三次元空間での立体をその空間の中には含まれていない方向、すなわち三次元でのあらゆる可能な方向以外、の外部へと動かすと、その軌跡として四次元の物体が生じる。もう一つは、三次元の物体は四次元空間での物体の断面であるとみなせることである。

四次元物体は三次元空間に含まれない方向への運動の軌跡として表され、その運動の方向は三次元空間の中にはない。空間におけるあらゆる運動には時間に関係している。とすれば運動と時間は四次元的に係わっているのではないか。ウスペンスキーはこうして独自の時間論・次元論を展開する²³⁾。私たちの時間概念は「過去・現在・未来」から成り立っている。過去は過ぎ去ってもう存在しない。一方、未来はまだ存在していない。だとすると存在しているのは一瞬の現在だけということになるが、それは絶えず過去へと溶け込んで行く。厳密にいうと「過去・現在・未来」は存在していないことになる。

ウスペンスキーはこうした状況は私たちの感覚器官による知覚に限界があるためであると考ええる。私たちの知覚が平面上の円の内部に限られていたとすると、円の外側や平面の上下にあ

る存在は私たちにとっては非存在である。感覚器官による知覚に制限されていない意識は、円の外側や平面を離れた世界を見ることができる。「過去」や「未来」は、三次元空間に含まれていない方向に延びている「時間という新しい空間」の広がりを考えることにより、現在と同様に存在しているといえる。私たちが見ているのは三次元の空間と時間面での断面である。したがって時間は「第四次元」である。

「時間」には「ある空間」と「空間における運動」という意味がある。しかし現実にはこの「運動」は存在しない。私たちが「時間という空間」を見ることができないために「運動」が存在しているように見えるだけである。それは四次元空間に対する不完全な時間感覚のため生じたものである。

四次元空間の特性を調べるためには、三次元空間と二次元平面を詳細に比較して、その間に存在する違いを知ることが有効である。これはヒントンが『思考の新紀元』で行ったことである。ウスペンスキーはこれが異なった二つの空間の間の問題ではなく、同一の空間を持った世界に対する二つの知覚様式の問題であることを強調している²⁴⁾。では低次元世界の生物は時間をどのように感じているのだろうか？ウスペンスキーは彼らにとっても時間はある種の運動や現象として知覚されることを示した。例えば二次元世界の生物が三次元世界を理解するためにはまず「二次元」であることを止めて、彼ら自身が「三次元」の存在にならなければいけないとしている。

では空間の次元とは何だろうか、そして私たちの世界はどのようにして三次元なのか？ウスペンスキーによれば数学は次元を感知しない。数学では空間はいくつかの代数記号で表される。しかしこれらの記号は実在物に対応したものではない。したがって幾何学によって次元を説明することができない。ヒントンはロバチェフスキーやガウスなどの非ユークリッド幾何学者を高次元空間に対する超幾何学と関連させている。これに対してウスペンスキーは、非ユークリッド幾何学は超幾何学と何の関係もないことを指摘し、ロバチェフスキーは三次元空間の範疇を出ていないと述べている²⁵⁾。

カントの命題から出発してヒントンの考え方を適用すれば、私たちが空間を三次元であると認識するのは、自分自身の内部に三次元空間の条件を備えているがためである。「空間の三次元性は私たちの心的構造にあり、知覚器官の中にあるのである。そして高次元世界の条件を発見しなければならないのもまたその中である」²⁶⁾。したがって上の問いに答えるためには我々の意識とその特性を研究しなければならない。

私たちの知覚は「感覚・表象・概念」という三つの段階から構成されている。外的世界の状態の変化を内的生活に反映させるのが感覚であり、表象は感覚の記憶が関連付けられ、結合され、対比されて生じるグループである。さらに表象のイメージについても同様なことが行われて概念となる。概念の形成は言語の形成、発生につながる。

私たちの空間の三次元性は心的構造が「感覚・表象・概念」から構成されていることに関連している。したがって「感覚だけを持つ存在にとっては世界は一次元であり、感覚と表象を持つ存在にとっては世界は二次元的であり、概念や観念に加えて「高次の知覚形態」を有するものにとっては世界は四次元である」²⁷⁾。動物は概念を持っておらず、その行動は反射的・本能的である。そのために動物は二次元の世界に住んでいるといえる。動物は三次元を感じることができ、それを見ることはない。彼らは三次元を私たちにとっての時間のように感じている。

同様に私たちによって運動や時間として知覚されているものは四次元の世界で静止している存在ではないだろうか。全ての物は時間の中に存在するが、私たちに見えるのは物の断面だけであり、私たちは物が運動しているという錯覚を持っている。高次元で静止している物体を私たちの知覚というのぞき穴を通してみることにより、本当は存在していない運動を見ていることになっている。低位から高位の空間に進むにつれて運動は消滅し、静止した物体の特性となる²⁸⁾。こうして意識と知覚形態の上昇と拡大につれて空間の性質は増加し、時間の性質は減少する。

ウスペンスキーは意識の拡大のためには、これまでとは異なった新しい論理体系が必要であると考えた。アリストテレスとフランシス・ベーコンを超えた第三の思考規範が。彼は新しい論理学の公理を「AはAであると同時に非Aである」あるいは「すべてのものはAであると同時に非Aである」または「すべてのものはすべてである」と表している²⁹⁾。

新しい意識の目覚めについてウスペンスキーは、カナダの物理学者リチャード・モーリス・バックの『宇宙意識』[33]での文章を引用して「宇宙意識とは普通の人間が所有している意識よりも高次の意識形態である」³⁰⁾と述べている。

ウスペンスキーの超空間哲学についての最後の著書が『新しい宇宙像』[18]である。この本は1931年に出版されたのであるが、その内容は以前から書かれていた。実際に1910年に出版された『四次元』が一部書き直されて、この本の第二章として再録されている。『ターシャム・オルガスム』以降のウスペンスキーの超空間哲学を直接扱ったのが、本のタイトルにもなっている第十章「新しい宇宙像」である。この部分は1911-1929年の間に書かれた。

この章は第一部と第二部に分かれている。ウスペンスキーは電子の発見(1897年)までの物理学を「旧物理」とし、それ以後のものを「新物理」と呼んでいる。第一部は古典物理学からアインシュタインの特殊相対性理論までの解説で、ウスペンスキー自身の特徴はあまりない。第二部でウスペンスキーはその超空間哲学をさらに前進させる。「新物理」で新しい世界像を構築するためには「湾曲した空間」を必要とするので、「旧物理」でのように四つの座標では不十分である。運動はそれ自身三つの次元を持っている。持続時間、速度、方向である。運動の尺度である時間を線で表すとすれば、三次元での線である「螺旋」となるであろう。

この時間の三次元性により、空間は「六次元」とみなすことができる。このとき全ての六次元体は、私たちにとっては時間の中に存在する「三次元体」であって、その五次元と六次元は私たちには知覚できないままである。

三次元の時間を図に描いてみることにする。「過去」「現在」「未来」の三つの点で定まる直線が時間を表している四番目の線になる。この直線に垂直な何本かの線を想像しよう。これが五次元を表している線である。これらの垂線はすべてある瞬間における「永遠の現在」を表している。それぞれの瞬間は多くの可能性を含んでいる。それらの可能性のうちのただ一つのみが現実化されて「今」を決定する。この現実化された点を結んでいるのが四次元の時間線となっている。時間線の垂線である五次元の線は「永遠」の線と考えられる。このとき時間は一本の直線ではなく、「時間面」で表され、個々の時間は完結した円となる。永遠とは「時間の湾曲」であり、この円に沿っての永久運動、永劫回帰である。先行する瞬間には含まれてはいたけれど、「時間」の中では実現されなかった他の可能性を現実化しているのが六次元の線である³¹⁾。

ウスペンスキーはこのような考え方を物質の構造、原子、電子、光子などに応用しようと試みている。しかしこの文章が仮に1929年に書かれたとしても、こうした「新物理」の現象はまだ十分に解明されておらず、彼の議論は現在では妥当でない点が多い。ド・ブロイの物質波の概念（1924年）、ハイゼンベルグ（1925年）とシュレディンガー（1926年）による量子力学は既に発表されていたが、この本では触れられていない。陽電子と中性子の発見（1932年）などとそれ以降の（新）物理学の発展を考えれば、この部分は現在では大幅に書き変える必要があるだろう。

ウスペンスキーはこの後グルジェフ思想の普及に従事し、彼自身の四次元や超空間に関する本を出版していない。グルジェフ思想の入門書といわれる『奇跡を求めて』[29]では、グルジェフが「マイクロコスモス」と「マクロコスモス」について語ったことを「君の言う次元の観点から検討しなさい」なさいと言われて、上の六次元空間の話をしている³²⁾。また「コスモス」についてのグルジェフの話を彼なりの次元論で解説している³³⁾。しかしこれらはいずれも難解なグルジェフの考えをウスペンスキー流の言葉で明解に説明したものであって、彼がグルジェフ思想の伝道師と言われている所以ではあるが、新しいものはない。

4 まとめ

ウスペンスキーはこれまでグルジェフの弟子、その思想の解説者として考えられてきた。しかし彼は、はじめてグルジェフに出会ったとき既に優れた「超空間哲学者」であり、ある意味ではグルジェフを凌駕していた。ウスペンスキーをグルジェフとは独立に取り上げることは非常に興味がある。このような試みはコリン・ウィルソンによって行われている[23]が、彼の空

間・時間論そのものにはそれほど重点が置かれていない。

ウスペンスキーはヒントンから大きな影響を受けており、『四次元』と『ターシャム・オルガスム』で四次元空間を認識することにより意識を進化させるという、ヒントンの超空間哲学を発展させた。第四番目の次元としてウスペンスキーは時間を考える。この点では時間と空間を同等に取り扱うアインシュタインやミンコフスキーの特殊相対性理論における四次元時空と似ている。しかし特殊相対論の時間は時の経過に対応する純粋な物理学的な時間であるのに対して、ウスペンスキーの時間は心的要素を含んでいる。彼は更に一步進んで、時間は四次元空間で私たちの四番目の次元に対する知覚が不十分なことによる結果であるとしている。『新しい宇宙像』では時間の三次元構造を考えて、空間は六次元であると主張している。

ウスペンスキーは永劫回帰より逃れる鍵を探すために東洋へ旅立った。これは単なる空間的な移動だけではなく、高次元意識の開発を求めた「心の旅」でもあった。その後共産主義革命を避けてグルジェフと黒海沿岸を彷徨い、コンスタンチノーブルに到着する。ロンドンに落ちて彼の旅は終わったが、心の旅は彼の死まで続いた。ウスペンスキーは超空間哲学を発展させたが、それだけでは問題を解決できないことに気づいていた。そんなときに出会ったのがグルジェフである。グルジェフはウスペンスキーの求めている答えを知っているように思われ、彼の下で「ワーク」を続けた。グルジェフと決別した後も彼の教えを信じ、超空間哲学と両立させようと試みている。こうした彼の心の旅は、奇妙な軌跡を描いている曲線のようなと言える。

最近の物理学では高次元空間の存在は常識となっている。リサ・ランドール(Lisa Randall)は高次元空間を導入することにより、素粒子物理学の問題が解決できることを示した[34]。残念ながら私たちの感覚器官では高次元空間を見ることはできないが、最新の実験装置を用いてその存在を調べる実験が計画されている。

一方、ウスペンスキーの発した「私たちの空間はなぜ三次元か？」という問いに対しては「人間原理」によって一つの解答が提供されている[35]。人間原理とは「現在の世界がこのようであるのは人間の生存に適しているからである」というものである。惑星の運動や原子構造が安定しているのは空間が三次元であるときのみであり、音による信号が歪みなく伝わるのも三次元だけである。とすれば私たちが存在するのも、言語による情報の伝達が可能なのも三次元空間ということになる。こうして三次元空間のみが人間の生存に適した空間であると言える。

グルジェフと出会った後、ウスペンスキーの超空間哲学は進歩していない。『新しい宇宙像』が出版された1931年からウスペンスキーが死亡した1947年までの間に自然科学は大きな進歩を遂げた。彼がその後『新しい宇宙像』での超空間哲学をどう発展させたか、現在の科学の進歩を体験したときにその時間論・空間論がどのように変化するのか、非常に興味のある問題である。

参考文献

1. H. P. Manning, *Geometry of Four Dimension* (Macmillan, London, 1914); Reprint (Dover, New York, 1956).
2. L. D. Henderson, *The Fourth Dimension and Non-Euclidean Geometry in Modern Art* (Princeton University Press, Princeton, 1983).
3. 向山毅「ルドルフ・シュタイナーと四次元」関西外国語大学研究論集第76号、87-102ページ、2002.
4. D. M. Y. Sommerville, *Bibliography of Non-Euclidean Geometry, including the Theory of Parallels, the Foundations of Geometry, and Space of n Dimensions* (Harrison & Sons, London, 1911 and Chelsea Publishing Company, New York, 1970).
5. I. Kant, *Die Kritik der rein Vernunft*, 2nd Edition (1781); 『純粹理性批判』篠田英雄訳 (岩波書店、1961).
6. J. Oppenheim, *The Other World: Spiritualism and Psychical Research in England, 1850-1914* (Cambridge University Press, Cambridge, 1985); 『英国心霊主義の抬頭』和田芳久訳 (工作舎、1992).
7. 向山毅「物理学者と超自然現象」関西外国語大学研究論集第84号、173-187ページ、2006.
8. J. K. F. Zöllner, *Wissenschaftliche Abhandlungen von Johann Karl Friedrich Zöllner*, Erster Band (L. Staackmann, Leipzig, 1878); *Transcendental Physics*, translated by C. C. Massey (W. H. Harrison, London, 1880).
9. E. A. Abbott, *Flatland: A Romance of Many Dimensions* (Seeley & Co., London, 1884); 『二次元の世界』高木茂男訳 (講談社、1977); 『多元国★平面国』石崎阿砂子、江頭満寿子訳 (東京図書、1992).
10. H. G. Wells, *Time Machine: An Invention* (Heinemann, London, 1895); 『タイムマシン』宇野利泰訳 (早川書房、1978).
11. P. J. Nahin, *Time Machines: Time Travel in Physics, Metaphysics, and Science Fiction*, 2nd Edition (Springer, New York, 2001).
12. C. H. Hinton, *A New Era of Thought* (Sonnenschein, London, 1900).
13. C. H. Hinton, *The Fourth Dimension* (Sonnenschein, London, 1904).
14. C. Bragdon, *A Primer of Higher Space* (Mana Press, Rochester, 1913)
15. C. Bragdon, *Four-Dimensional Vitas* (Mana Press, Rochester, 1916)
16. P. D. Uspenskii, *Chetovertoe izmerenie: Opyt izsledovaniia oblasti neizmerimago (The Fourth Dimension: An Experiment in the Examination of the Realm of the Inmeasurable)* (Trud, St. Petersburg, 1910).
17. P. D. Uspenskii, *Tertium Organum: Kliuch k zagadkam mira (Tertium Organum: A Key to the Enigmas of the World)* (Trud, St. Petersburg, 1912); *Tertium Organum: The Third Canon of Thought*, translated by N. Bessaraboff and C. Bragdon (Mana Press, Rochester, 1920); 『ターシャム・オルガスム (第三の思考規範——世界の謎への鍵)』高橋弘泰訳 (コスモス・ライブラリー、2000).
18. P. D. Ouspensky, *A New Model of the Universe* (A. A. Knopf, New York, 1931); 部分訳『超宇宙論』高

- 橋克己訳（工作舎、1980）；『新しい宇宙像 上・下』高橋弘泰訳（コスモス・ライブラリー、2002）。
19. R. Steiner, *Die vierte Dimension: Mathematik und Wirklichkeit* (Rudolf Steiner Verlag, Dornach, 1995); English transl. *The Fourth Dimension: Sacred Geometry, Alchemy, and Mathematics* (Anthroposophic Press, Gt. Barrington, MA, 2001).
 20. R. Rucker, *The Fourth Dimension; A Guided Tour of the Higher Universes* (Houghton Mifflin Company, Boston, 1984); 『四次元の冒険—幾何学・宇宙・想像力』金子務訳（工作舎、1989）。
 21. 向山毅「クロード・ブラグドン—四次元の伝道師」関西外国語大学研究論集第80号、97-112ページ、2004。
 22. C. Wilson, *The Occult* (Random House, London, 1971); 『オカルト 上・下』中村保男訳（新潮社、1973、河出書房新社、1995）。
 23. C. Wilson, *The Strange Life of P. D. Ouspensky* (Aquarian, London, 1993); 『二十世紀の神秘思想家 ウスペンスキー』中村正明訳（河出書房新社、1995）。
 24. J. H. Reyner, *Ouspensky: The Unsung Genius* (George Allen & Unwin, London, 1981).
 25. G. Lechman, *In Search of P. D. Ouspensky: The Genius in the Shadow of Gurdjieff* (Theosophical Publishing House, Illinois, 2004).
 26. B. Hunter, *Don't Forget: P. D. Ouspensky's Life of Self-Remembering* (Bardic Press, California, 2006).
 27. P. D. Ouspensky, Autobiographic Framgment in *Further Record* (Stourton, London, 1952).
 28. P. D. Ouspensky, *Strange Life of Ivan Osokin* (Stourton, London, 1947).
 29. P. D. Ouspensky, *In Search of the Miraculous: Fragments of an Unknown Teaching* (Routledge, London, and Hartcourt Brace, New York, 1949); 『奇跡を求めて』浅井雅志訳（平川出版社、1981）。
 30. W. P. Patterson, *Struggle of the Magicians: Why Ouspensky Left Gurdjieff* (Arete Communications, California, 1996).
 31. 小森健太郎『グルジェフの残影』（文藝春秋、2006）。
 32. P. Washington, *Madame Blavatsky's Baboon* (Secker & Warburg, London, 1993); 『神秘主義への扉—現代のオカルティズムはどこから来たか』白幡節子、門田俊夫訳（中央公論新社、1999）。
 33. R. M. Bucke, *Cosmic Consciousness: A Study in the Evolution of the Human Mind* (Innes, Philadelphia, 1901); 『宇宙意識』尾本憲昭訳（ナチュラルスピリット、2004）。
 34. L. Randall, *Warped Passages: Unravelling the Universe's Hidden Dimensions* (HarperCollins Publishers, New York, 2005); 『ワープする宇宙』塩原通緒訳（NHK出版、2007）。
 35. J. D. Barrow and F. J. Tipler, *The Anthropic Cosmological Principle* (Oxford University Press, New York, 1986).

注

- 1) ロバチェフスキーとポヤイの幾何学は非ユークリッド幾何学だが、三次元空間に対するものである。一方、リーマンは別の形の非ユークリッド幾何学を n 次元空間について提案した。
- 2) 1970年の第二版では、その後出版された書籍のリストが追加されている。
- 3) 文献2のp.25。
- 4) 文献18には二種類の日本語訳があるが、『超宇宙論』には多くの誤訳があることが指摘されているのでここでは『新しい宇宙論』の方を用いることにする。
<http://homepage1.nifty.com/pdo/linktyo.htm> を参照のこと。
- 5) コリン・ウィルソンは後にグルジェフとは独立にウスペンスキーの伝記[23]を書いている。
- 6) 文献2のpp.245-255。
- 7) 日本語訳が次のホームページにある。
<http://homepage1.nifty.com/pdo/linkautbio.htm>
- 8) 文献2のp.246。
- 9) 文献18の3-4ページ。
- 10) 文献22の45ページ。
- 11) 文献23の59ページ、注1。パスポートに記載された生年月日による。彼のホームページ
<http://www.geocities.com/Paris/1181/> によると1866年となっている。
- 12) 文献2のp.245の注27。
- 13) 文献2のp.248。
- 14) 文献18の101ページ。
- 15) 同様な指摘がヘンダーソンによって行われている。文献2のpp.254-255。
- 16) 文献18の111-115ページ。
- 17) 文献18の115-116ページ。
- 18) 文献18の124ページ。
- 19) 文献18の133ページ。
- 20) 文献17の307-308ページ。
- 21) 文献17の1ページ。
- 22) 文献23の37ページ。
- 23) 文献17の第3-5章。
- 24) 文献17の77-78ページ。
- 25) 文献17の83-84ページ。
- 26) 文献17の86ページ。
- 27) 文献17の94ページ。
- 28) 文献17の135ページ。

- 29) 文献17の319ページ。
- 30) 文献17の389ページ。
- 31) 文献18の223-232ページ。
- 32) 文献29の326-331ページ。
- 33) 文献29の513-520ページ。

(むこやま・たけし 外国語学部教授)